

京都文教大学人間学研究所共同研究プロジェクト
「日・中・英の諺による異文化の比較研究」主催 公開講演会

日時：2010年7月14日（水）18：00－19：30

会場：京都文教大学 普照館 F305教室

「ことわざ研究の諸問題」

講 師：龍谷大学名誉教授 文学博士 秋本 守英 氏

永野貴子：本学人間学研究所における共同研究として「日・中・英の諺による異文化の比較研究」という研究会を立ち上げているんですが、その研究会の一環として、本日、龍谷大学の名誉教授でいらっしゃる、文学博士の秋本守英先生に「ことわざ研究の諸問題」というテーマでご講演をいただきます。見回しますとほとんどの人が、教職免許資格取得を目指している方達ですが、もちろん教職関係以外の人もたくさん来て頂き、実施の意図が広範に伝わった証ではないかと、主催した者として喜んでおります。

さて、日常生活の中でみなさんが何気なく使っている言語というものが、最近、本来の使われ方からいろいろと変わってきています。今風にという変わり方もしている訳ですが、スタンダードな使い方が本当になされているだろうかという疑問を持つことが多くなりました。もちろん、ことわざの引用などはかなり曖昧な状況ではないかと思われれます。そういうことも含めまして、ことわざとはどういうものなのか、言葉とはどういうものなのかということを中心に、今から秋本先生にご講演をいただきたいと思います。それでは秋本先生どうぞよろしくお願い致します。

秋本守英：ただいまご紹介いただきました秋本です。私の専門は、学問領域で言いますと、国語学、つまり国語、日本語ですね、日本語の組織・体系・歴史そういうものを研究する学問、これを国語学あるいは日本語学とも言っております。その国語学、日本語、国語の組織・体系・歴史を研究する学問であります。そして、

永野先生からご下命を受けましたのが、ことわざについてのお話をしてくれということであります。ことわざっていうのはもちろん、言葉を仲立ちとして作られております。そこで、私は国語学の立場からことわざについて考えていくこと、これを少々お話ししたいというふうに思っています。なおこの研究というのは、ことわざを日本、中国、あるいは英米ですね、そのあたりのことわざを通して、それぞれの生活、文化、そういうものの違いをみていこう、そういうものを通して、さらにコミュニケーションについて図ることを考えようというのが、主題のようであります。なので、当然、日中英のことわざについても考えるということも、若干は致したいと思います。ただ、私の専門は国語であります。中国語、英語については、ほとんど知識は無いに等しい。それを、なんか無理をしながら、中国のことわざ、英語のことわざ、そういうものを交えてお話を致したいと思います。そこで、ことわざっていうのは何かということを考える前に、言葉っていうのはどういう構造



になっているのか、ということのお話からいたします。それがまた、ことわざに関係してまいります。

それで、お手元のプリントの“ことばの内と外”（図1）というところをご覧くださいと思います。プリントのことですが、私はパソコン、あるいは携帯電話、あるいは自動車の運転、そういうものは一切できません。だから、ものを書くにしても全て手書きしかできませんので、ちょっとお見苦しいところもあるかもしれませんが、そのところはご辛抱いただきたいと思います。で、最初に円を描きましたけれども、これも手書きでありますので、だいぶムニャムニャと曲がっております。それも、ご辛抱願いたいと思います。

さて、円を描きました、その太い線、その中がこれこそ言葉そのものであります。で、その中で、中心に“音韻”と書いてあります。それから、その外側に“文法”と書いてあります。そして、一番外側に“語彙”というふうに書いてあります。これはどういう意味かといいますと、我々が使っている言葉の一番言葉らしい側面は何か、それが“音韻”ということになります。私も今、音声を使ってお話をしているわけでありまして。僕が用いている音声、これは日本語の音韻に基づいて、話をしているわけでありまして、その音の問題、これが言葉の中で一番、しっかりとした体系を持っているということになります。

例えば、日本語にはどんな母音があるかという、ア・イ・ウ・エ・オという母音があるの

はよくご存知だろうと思います。じゃあどうい子音があるかという、か行の〔k〕とか、さ行の〔s〕、というふう子音がずっと挙げられます。それらがどんなふう子音と母音と組み合わせられて、日本語というものが出来上がっているかといいますと、原則的に、子音+母音という形、例えば“カ”ですと、〔k〕という子音に〔a〕という母音が一緒になって“カ”という音が出来上がっています。そのように日本語の音というのは、基本的に子音+母音というように構成され、そういう音がいろいろと組み合わせられて、僕が今話をしているような日本語の音というものが出来上がっている、ということでありまして。

そうすると、じゃあ英語の場合はどうなっているかという、英語の場合は、子音+母音というのはありますけれども、例えば“desk”という名詞を考えますと、これは子音+母音+子音+子音、これで一つの音になっていますね。

〔dɛsk〕これで一つなんです。日本語のように子音+母音で一つの音になるということにはならない。だから、この“desk”という英語、これはこれで一音なんですね。〔dɛsk〕で一音。ところが我々がこれをカタカナで書こうとしますと“デ・ス・ク”というふうに書いてしまいます。そうするとこの“デ・ス・ク”というのは日本語ではどう考えるかという、デで一音、スで一音、クで一音、そしてその中身はというと、“デ”は子音+母音、“ス”も子音+母音、それから“ク”も子音+母音というふうに、三つの音から“デ・ス・ク”という一つの語が出来上がっていくというふうなことになるてまいります。そうすると、どうして“desk”という一音のはずの英語が、日本語では“デ・ス・ク”というような三つの音になるのかという、これは英語と日本語とでは音韻の構造が違うからです。これは動かしようがありません。そんなふう子音と母音とで、その言語の中で非常にしっかりした体系をもっているということでありまして。

それに対して“文法”というのは、これは一番みなさんが言葉の中ではご存知の部分だろうと思います。要するに文法というのは、文の法則ですね。つまり単語がどんなふう子音と母音とに組み合わせられて、



図1：ことばの内と外

されて文を作っていくのか、その単語が文を作っていく上でのきまり、法則、これが文法というものです。これはこれで、例えば、“わたくしは”という“わたくし”という名詞があって、その後に“は”がつきますね。つまり、なにか名詞の後には、“は”とか“が”とか“に”とかいうような助詞がつきます。じゃあそれが反対になると“にわたくし”、こういうことは決して言いません。つまりこれが日本語の中で、単語が文を作っていくそのきまりの一種であります。そこで、英語には英語なりのきまりというものがあります。例えば、主語、述語、という具合ですと、主語→述語の順になる。そこで“私はこの本を読む”という場合ですと、“I read this book.”というふうにいいますが、そうするとまず主語がきて、動詞がきて、そして、bookというような目的語がくる。こういう順序で、単語を並べて文を作ります。ところが、日本語の場合ですと、“私は本を読む”というように、語を並べる順序が英語とは違いますね。こんなふうに、文法は文法で、英語の文法と日本語の文法とではまた異なってくるということです。そして、それぞれがしっかりした体系を持っているということでもあります。ただしこれは、音韻ほどに体系の縛りというのはきつくない。文法の方が、少し細かく法則というのは分かれてまいります。あなたがたご存知のように、例えば日本語の動詞はどう活用するかというと、あるものは、カ・キ・ク・ク・ケ・ケと活用したり、あるいは、セ・シ・ス・スル・スレ・セヨというように活用したりと、そういうふうに分かれていきます。つまり、音韻に比べますと、若干その体系というものが弱くなるということでもあります。きまりが細かくなっていきます。きまりが個別的になっていきます。

そして、プリントの円の一番外側に書きました“語彙”。“語”は“単語”、“彙”は“集まり”という意味です。だから、“語彙”というのは“単語の集まり”“単語の集団”となる。で、単語というのは、例えばここにペットボトルというものがあります。で、これは、ペットボトルというものの自体は言葉じゃありませんね。

これは、モノであります。で、これを我々は“ペットボトル”という言葉で呼んでおります。つまり、単語というのは、言葉の外側のモノに対する人間の認識を一つ一つ、切り取ったものなんです。そこで、その集まりが“語彙”ということになります。ちょっと話が難しくなっておるかもしれませんが。だから、語彙というのは、まあ簡単にいえば、言葉の中の一番外側にあって、言葉ではない事物の世界に隣接するもの、言葉の中で事物の一番近くにあるもの、これが、語彙です。だから、語彙の総体というのは、これは、外界の全て。つまり、事物の世界全体が、語彙の世界ということになってまいります。ですから、例えばこんなペットボトルなんてものは、三十年くらい前には多分なかったと思います。ところが、こういうものが出来上がった。そうすると、“ペットボトル”というような名詞を作ります。最近のものと、実は私は中身については全然知りませんけれども、言葉として、なんか“iPad”てな物があると…。最近テレビでもなんかいろいろ言っておりますけれども…。あんなものは、つい2、3年前まではなかったんですね。というよりも、ほんの今年になってからですか？あんなもん出来上がったのは。つまり、物ができると、言葉ができる。物に即応して、物だけじゃなくて、事柄でもそうですね。事柄に即応し、物に即応して、言葉ができる。ですから、全体というのは、“事物の世界そのもの”ということになります。そうすると、はなはだこれは“個別的”ですね。だから、音韻とか文法のように、体系全体じゃなくって、むしろ、言葉の外側のものと一対一で結びつき、関わりが非常に強いものということでもあります。これが、“語彙”というものです。

ここで、言葉の構造自体を一応、“音韻”“文法”“語彙”という三つの側面から説明したことになります。ですから、ここに示したように、中心にあるもの“音韻”、これが一番体系的、これが言語の中核になり、そのほんの外側に文法があり、一番言葉の中では言葉らしくないもの、これが語彙ということになるわけです。もちろんそういうのも言葉ですよ、言葉だ

けれども、言葉の中で一番事物の世界に近いもの、これが語彙ということでもあります。どうしてこんな話をしたかといいますと、実は今日お話をする中心になるのは“ことわざ”ですね。じゃあ“ことわざ”というのは、そういう言葉の中でどういう位置を占めるのかということですが…。

まず“ことわざ”というのは、まあなんでも、こういう研究をしている人間はなにかある事柄が出てまいりますと、これこれはどういうものかという、定義づけということをどうしてもしないと気がすまないのです。そこで“ことわざ”とは何かということ、これもやっぱり言っておかないといけません。実は今日四冊ほどことわざに関する書物を持ってきたんですけど、みんな定義の仕方が違うんですね。必ずしも一様じゃありません。そこで、私が今日ことわざの話をしようということになると、私なりの定義づけということをまずしておかないと、話をする者の責任が果たせませんので、私なりの定義づけをしました。お配りしたプリントに書いてあるようなことになります。「人間や人生、社会の諸事象の一面をとらえて簡潔に述べた成句で、人々の間で、知識・知恵・教訓などとして長く用いられてきたもの」。成句というのは、ある“まとまった句”、“まとまった語句”という意味です。そしてそれは、人々の間で、知識、知恵、教訓などとして、長く用いられてきたものなのです。だから条件は二つあるわけですね。内容はどうかというと、人間、人生、社会の諸事象の一面を捉えて、簡潔に述べた成句。この「諸事象」というのは、ちょっとややこしい、難しい言葉を使いましたけれども、語彙の場合は、そこに“事物（じぶつ）”という言葉を使いました。事物とは、文字通り“事”と“物”ですね。だから外界のすべてが事物ということになります。それに対して“事象（じしょう）”、人間や人生、社会の諸事象、“事象”という言葉を使いましたが、これは言ってみれば“事柄”ということ。だから“事物”とは違うんですね。“事象”っていうのは、“事柄”という意味です。あるいはややこしい言い方ですけども、もう少しわかりやすい言葉

を使うと、これは“物事（ものごと）”です。

“物事”と“事物（じぶつ）”とどう違うのか。

“物事”というのは、「アイツは物事を知らない」「物事には順序がある」などと言いますが、“物事”の中には“モノ”は含まないんですね、実際には。“事物”っていうのは、“事（コト）”と“物（モノ）”ですから“モノ”も含まれますけれども、“事象”をわかりやすく言えば、“物事”になる。その場合には、“事柄”だけであって、“モノ”は含みません。そこで、“ことわざ”というのは、そういう“物事”の一面を、つまり我々の人間生活の中で、実際に存在する、“事柄”の一面を捉えている。だから一面であって、全面ではないのです。そしてそれを、ゴジャゴジャと、私の話のようにゴジャゴジャと説明するのではなく、もっと簡単に一言でパッと説明して、しかもまとまりがある。そういう簡潔に述べた成句ということになります。一応一番簡単に定義づけをすれば、そういうことになるかと思います。

そしてさらに条件として、単に、そういうような成句だけが“ことわざ”の条件なのではなくって、“ことわざ”と言われる限りは、人々の間でやっぱり知識とか知恵とか教訓とか、いろいろことわざによって違いはありますけれども、ある程度長く用いられていないと、これは“ことわざ”とは言えない。だから条件としては、人間、人生、社会のいろいろな事象の一面を捉える。一面というのは、狭く切ったその切り口の中に見えてくるもの、これが“一面”です。だから人生のすべてをことわざが言い当てることができる、そんなものじゃありません。ことわざというのはそんなに…どう言ったらいいですかねえ、偉いものではありません。ことわざというのはほんの一部分、ある一つの面についてしか指摘しておりません。そういうものが、“ことわざ”であります。ところが“語彙”の場合、単語の一つずつ、これは文字通り一つずつですけれども、全体になれば、言葉の外側の世界全体、だから大そうに言えば、全宇宙を捉えている。これが“語彙”の世界ですが、“ことわざ”というのは、“事柄”の一つを捉えているのです。そういうところであ

りますから、“語彙”とはまったく分量が違う。まあ実際、量の違いというのは、質の違いになるわけですが、わかりやすく言えば、全体と一部分という違いがあります。ことわざとはそういうものであります。

そしてそれはどんなふうになされてきたかというと、不特定の人々が長い間いろんな生活をする中で自然に出てきた知識なり、考え方なりが成句となったというわけです。ただ、例外というのがその後ですね。中にはそういう不特定の人々ではなくて、特定の人々が、何か自分の考えていること、あるいは、「これはこうに違いない」というふうに言ったことをまとめた言葉、手取り早く言えば、孔子なんかの言葉ですね。孔子とかキリストとか、そのような特定の個人が、人生あるいは世間に関する事を一言でパッと述べます。それが、非常にある真理をついていてということで、多くの人たちが自然に作り出してきたものと同じように、人間の中でずっと長く用いられて、そして固定していく。そういうものの中にはあるということでもあります。例えば、元々は“ことわざ”として出てきた成句ではありませんが、「巧言令色少なし仁」という言葉、これは孔子が言い出したことですが、日本ではそれを、もうなんかことわざであるかのように、日常生活に用いたりするようになってしまっております。ですから日本人がそういうものを、“ことわざ”と言っているものの中に含めてしまっている。こういうことであります。

それでは、“ことわざ”というのは、もう少し分析すれば、どういう性質を持っているかというと、その次に書きましたように、“ことわざ”は一つずつが独立しているということです。下にはいろいろいくつかの例を書いておりますけれども、例えば「猿も木から落ちる」というようなことわざがありますと、これはもうこれで、独立した完結体ということです。この「猿も木から落ちる」と何か密接に関係のあることわざが存在するか。例えば「猫は木から落ちない」と言っても、これはことわざにはならないですね。つまり、ことわざというのは一つずつが独立して、相互には関係が無いんです。そし

て、その一つずつがさっきの定義づけと関係しますけれども、それぞれの国のそれぞれのことわざが出てきたそれぞれの世界の、生活とか文化とかを背景にして存在する。だから、生活や文化を除いて、無視して、そのことわざは存在するものではない。だから別の言い方をすると、生活や文化の中から生み出されたもの、というふうに言うこともできます。というようなことでありますから、ことわざ全体としての体系というのはないんですね。先程言いました“言葉”の中で、外側のものである“語彙”、これはやはり語彙体系というものがあると考えております。それはどういうものか、これは非常に難しいです。これは未だに研究者がはっきりと「こういうものだ」というふうには言えない。これは先程も言いましたように、“語彙”の世界というのは、全宇宙の体系そのものである、ということでもありますから、これはやはり、それを解決してくれるのは、僕は哲学だろうと思います。それに対して、“ことわざ”というのは、そんな上等なものではないんですね。ですから、ことわざに体系というのはないんです。

ところで、これはちょっと言い訳になりますけれども、僕は国語学を専攻している者です。言葉の体系というものがどういうものなのか、歴史というのはどういうものなのかということ、ずっと頭におきながら、いろいろ勉強しておるんですが、ことわざというのは、頭からそういうのが無いものでありますから、僕の専門からしますと、どうもはなはだ不得手な世界のものであります。不得手であろうと、とにかく言葉に関係するものだから、「おまえこれしゃべれ」というのが永野先生のご命令であります。

そんなことで、ことわざには、体系が無い。じゃあそしたら、いったい何をもってことわざの特徴とするかというと、一つずつが独立した完結体でありますから、ことわざの特徴というのは、内容的に非常に多面的である。つまり一つずつが、“事象”の一面ですから、全部を合わせますと、これは多面ということになります。そして一つの事柄について、見方が必ずしも一様ではない。いくつもの見方、考え方があ

だからこれは“多様”というふうに言えるかと思いますが。そのへんが、言葉を研究している私から見た“ことわざの定義づけ”、それから“ことわざの性質”あるいは“特徴”ということになってくるかと思います。

さらに、これはついでではありますが、よくことわざは、「生活の知恵である」とか、「経験から出た知恵の宝庫である」とかいうようなことが、ことわざについて書かれた書物にはあります。じゃあそんな結構なものだから、ということで実際に我々がことわざをどんなふうに使っているか、ということを考えてみましょう。実際に我々が生きていく上で、「この場合どうしたらよかろうか」、というふうになった時に、ことわざを持ってきて、「あ！ ことわざにこうあるから、こうしよう」「じゃこれは私一人でやろうか、それとも誰かに相談しようか、いや『三人寄れば文殊の知恵』ということわざがあるから、これは三人で考えましょう」てなことをするかと言うと、そういうことはしません。むしろ、「あ、三人寄って考えたらこういう名案がでてきた。なるほど。三人寄れば文殊の知恵とはよく言ったものだ」というふうなことわざを使うのが普通であります。つまり、もうすでに成立した…難しい言い方ですけど、終わった事柄ですね、為し終わった事柄、これが、どんな考えから出てくる、どんな考えに基づけばそういうことが言えるのか。つまりは行為とかあるいは考え方の正当性ですね、それをことわざによって確認するというような使い方が、一番ことわざの普通の使い方だろうと思います。ですから、これらを私なりに言わせれば、どこまでも考えなり、あるいは、判断なり、行動なりの妥当性を保証する拠り所としてことわざを用いる、これがまあ普通のことわざの使い方だろうと思います。ことわざによって、「こう判断しましょう」「こう行動しましょう」というようなことには、使わない。ことわざというのは、そういう使い方をするものじゃなくて、「なるほど。こういうものか。世の中ってのはこういうものか」というふうに納得する。その手立てとして、ことわざは存在するというふうに思います。ですから、よく「経験

の、知恵の宝庫」とか言いますけれども、それはどこまでも結果であって、それによって、その知恵を使ってどうこうする、というものじゃない。だから、ちょっとこれも先程と同じような言い方になりますが、ことわざというのはそんなに偉いものではないんです。ということをして、ことわざを考える場合に、一応、認識しておく必要があるだろうということであります。以上が、ことわざというものを言葉を中心にして考えていくようになります、という私なりの考えであります。

そして、今、共同研究として行われておる、ことわざを用いて、異文化の比較研究をするということをして、みなさん方が行っておられるようでありますけれども、ではそういうことは可能であるか？ これは充分可能であります。というよりも、正当性のあることあります。というのは先程も言いましたように、ことわざというのは、そのことわざが用いられた、社会、文化、そういうものが背景となって成立するのでありますから、ことわざを通して、生活とか文化、あるいは考え方、そういうものを見ることは充分に可能であります。そしてさらに、その、比較研究、ことわざによって異文化を、異文化の比較研究をする。それを特に、日本語、中国語、そして英語、そういうもののことわざの比較を通して、日中英の生活、文化、考え方、そういうものを見ていこうというのが、研究の主旨、目的ということありますので、その日中英のことわざそのものですね、今度はことわざ一般じゃなくて、日本のことわざ、中国のことわざ、英国のことわざ、そういうものの性質・特徴、そういうものを少し、というのは、全部を私は知りませんので、ほんの少し見ていこうということあります。まず、私に分かるのは、日本のことわざだけです。正直なところ。

それで、まず日本のことわざの特徴というのを見ていきますと、そこに記しましたように、日本のことわざというのは、小難しくいいますと、三層構造、三つの層に分けることができます。まず一つは、そもそも日本人が作り出したことわざではなく、中国の人たちが、中国の古典の中で、いろいろな知恵をまとめた言葉と

して表現したものであります。先程も言いましたような孔子とか、孟子、あるいは老子、莊子、まあそういった、特に古い時代の人たちが、自分たちの考え方をまとめたものがあります。その中で、日本に伝えられたものの中から、日本人が、実際自分たちがいろいろなものを考える上で、参考にするというような方法でよく使っています。例えば、「奢れる者は久しからず」。これは老子という道家の人が言った言葉ですが、もうご存知のように、『平家物語』の最初、「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」というように始まる、平家物語の冒頭ですね。その中で、「奢れる者は久しからず、唯、春の夜の夢のごとし」というふうに使ったりしています。それほどまでに、これは日本の古典にも使われるようになった中国の成句であります。それからその次の、「国破れて山河あり」これは、ご存知の通り、唐の詩人、杜甫ですね。杜甫が『春望』、春の風景、眺めですね。『春望』という詩の最初に「国破れて山河あり」、それに続いて「城春にして草木探し」というような、詩を詠んでおります。その最初の句「国破れて山河あり」、これはやっぱり、いろいろ戦争の後の状況がどうだとかいうような場合に、よく引き合いに出したりしております。実際作ったのは杜甫が自分の詩を詠む中で作った言葉なんですけれども、日本人は、それをむしろ、なんか戦争の後の荒れ果てた状況の慣用句のような形で、これを用いるというようなことをしております。というように、中国の古典で作られた言葉、これをことわざのように用いるということがあります。さらに、これは『論語』に出てくる言葉ですけれども「温故知新」、これを訓読すれば「古きをたずねて、新しきを知る」というふうに言っております。だからこれなんかは、「温故知新」という漢語で言ったり、あるいは「古きをたずねて、新しきを知る」というような漢文訓読調で言ったり、どちらにしても、両方の使い方を日本人はしております。そのようなものもある訳であります。

こういう漢語のものというのはどういうものか、我々は「温故知新（おんこちしん）」が、漢語で、漢語というと中国語のように思います

けど、こんなものは中国語でもなんでもありませんよね。これは日本語です。漢語っていうのはどういうものかということ、中国語に似たように発音された日本語です。擬似中国語、これが漢語というものです。ですから例えば、英語でいいますと「flower」という英語、この僕の英語の発音も危ないもんですけどね、まあこれはもう、まともな発音だと思って聞いて下さい。実際の発音としては、[flauə]というふうになります。これは、英語であります。日本人はこれをさっきの「デスク」と同じことでね、「フラワー」と言ったりしてしまいます。それで「フラワーショップ」というのがありますね、花屋さん。じゃ「フラワーショップ」というのは英語かということ、あれは、英語を真似した日本語であります。どこにでも書かれているフラワーショップなんていうのは、あれは日本語なんです。漢語にしても、この「温故知新」というのは、これは中国語のようでありますけれども、そうじゃなくって、言ってみれば、中国語に似せた日本語ということです。「フラワー」というのも、英語のつもりで言った日本語ということになります。そこで、そのような漢語が、中国のことわざとして日本語の中で使われる。「四十歳」のことを「不惑」と言ったりしていますね。これも論語の中で「四十にして惑わず」というふうに書いてある。そこで「四十」のことを、「やっと思も不惑の年になった」というふうに言ったりするわけあります。これも、中国語風の日本語です。そんなものが日本語の中に用いられったりします。ですから中国の古典から出てきたものの中に、一つは、擬似中国語、日本について言えば漢語ですね。漢語のまま用いる言葉と、そして「国破れて山河あり」とか、「去るものは日々に疎し」とかいうような漢文、「漢文訓読文」と普通に言われているものがあります。ついでにこの漢文訓読文というのはどういうものかといいますと、これは中国語を日本の古典の文法を使いながら翻訳したもの。これが漢文訓読文です。だから漢文や漢文訓読文というのはどこまでも日本語なんです、日本語の中でも現代語じゃなく、まあ言ってみれば古典語なんですね。だから中

国の古典に由来するものには、漢語を用いるもの、つまり擬似中国語のものと、そして日本語の特に古典語に翻訳したもの、その二通りがあるということです。

それから、日本にはこういうものもあります。「猿も木から落ちる」とか「暖簾に腕押し」とか、我々がもっとも俗に用いているもの。これはどうも、概して言えば江戸時代頃から用いられてきたもののようであります。ちょっと前のものも無いではありませんけれども、大きく言えば、江戸時代にもっともたくさん作られたもの、江戸時代の庶民の生活の中から作られたもの。これがこういった類のことわざであります。それから今、少し系統の違ったものとして、ここに書きましような、欧米渡来のもの。欧米渡来といっても別に、いきなり英語でことわざを言うわけじゃなくて、欧米から入ってきたものを日本語に翻訳して、そしてことわざとして用いる。有名なのは、「時は金なり」なんてものは、これは「time is money」というふうには英語でそのまま用いたりすることもありますね。「時は金なり」というのは、それをちょっと文語ふうには翻訳したものです。それから、あれっと思うのは「一石二鳥」。これはなんか中国から来たもののように思われますけれども、そうじゃなくて、これは英語のことわざの翻訳であります。「一石二鳥」ならいいんですけどね、英語になると「kill to birds with one stone」、「二羽の鳥を一つの石で殺す」と、わざわざ「kill」なんて言葉を使うんですね。これを「一石二鳥」というふうには、漢語に翻訳したもの。これがわりあい日常的に「それは一石二鳥やなあ」というような使い方をしております。イギリス人はそれを「一つの石で二羽の鳥を殺す」ってなふうにはことわざとして言うんですね。まあそういうふうに、欧米から来たもの、欧米から入ってきて、それを日本語に翻訳したものもあります。わりあい多いのは、やはり聖書ですね。バイブルで使われた言葉を、日本語に翻訳したもの、これが多い。「天は自ら助くる者を助く」なんてのは、これは新約聖書に出てくる言葉のようであります。“ようであります”というのは私、新約聖書を全部調べ

てその中からこれを引っ張り出したというものじゃなくて、こういうのがあると書いてあったので、これを用いたというだけの話しであります。まあそんなふうには、欧米から入ってきて、そして日本人が、日本のことわざであるかのように使っている、そういうものもあるということでもあります。このように、日本のことわざには、中国の古典に由来するもの、それから日本に固有のもの、それからさらに欧米から入り込んできたもの、そういう三つの種類のことわざを、別に「これはこうだ」というような区別をすることなしに用いているんだ、というようなところがあるわけです。

そういうような日本のことわざの構造、それを知った上で、日本、中国、英米、といった三つのことわざを比較する。そういう作業をしていかなければならないということになってまいります。そこで、その比較をする場合に、普通は比較ですと、対等の条件で比較しないといけません。ところが、私のできることは、日本語については、ある程度の知識はありますけれども、中国、あるいは、英米のことわざについてはそんなに知識はありません。特に中国の場合ですと、その古典についてはある程度、知識は持っております。これは、日本人もちゃんと中学・高校で漢文というふうなものがあるわけですから、まるまるの中国語ではなくとも、中国の古い事柄についての知識はある程度みんなが持っているわけであります。けれども、近代あるいは現代の中国がどうであるか。これは私としては全然知識がありません。書物は出ておりますけれども、中国のことわざ、現在のことわざについて、こういうものがありますというふうな、いわゆることわざ辞典に属するものが出てはおりますけれども、そういうものは調べないと出てこない。それから英語についても、部分的に、新約聖書からでた言葉だとか、あるいは中には、さっきの中国の場合の孔子とか孟子とかと同じように、例えば、シェークスピアの戯曲のセリフの中から、「憐れなる者よ汝の名は女なり」とかいうようなセリフなんかが入り込んできて、そして、日本語の中でことわざのように用いられるというふうなことも中には

あります。けれどもどちらにしても、中国の近代・現代のことわざがどうなのか、それからイギリスなりアメリカなりの古いことわざと新しいことわざとがどんな関係で、どのように使われているのか、こういうことはあまり知らないです。

日中英の三つのことわざの比較研究という場合ですと、やっぱり同じ条件で比較研究しないことには、まともな学問的批判に耐えうるような比較研究とは言えない。だからそのところを、どのように資料を整えていくか、これが、これからの研究の大きい課題であろうというふうに思います。その前提として日本のことわざに見受けられる問題があって、それと同じような事柄を、中国あるいは英米のことわざについても考えて、同じ条件で研究を始めないことには、非常に不均衡な、不公平な研究になってくのではないか、そういうことであります。

話し始めて、ちょっと予定よりは越えましたけれども、一応あと、30分くらいをみなさんからのいろんなご質問があれば、一緒に考えていこうというふうに思っております。その中でまた、なんかちょっと言い忘れたようなことも思い出せば、また申し上げるということにいたします。

永野：ありがとうございます。言葉というのが、私たちの生活に非常に密接に関わっており、その言葉がどのようにして生まれてくるのかというようなお話から、ことわざのところに導いていただきましたが、最後の方で先生が非常に重要な、キーワードをだして下さったと思います。それは物事を比較するということは、対等な条件のもとで比較しなければいけないということ。条件が対等でない場合は比較にならないんだということを教えていただきました。もちろん、この研究を進めていく上での課題ということで、お示しいただいたんですが、ここにいる学生のみなさんたちは、大半の人たちが3年生4年生の人たちですし、もうゼミの方で自分たちのいろいろな研究を進めていることと思います。けれども、なにかを比較するいう時に、それぞれを対等な条件のもとにおいて

比較していくという非常に有意義なキーワードを頂いたと思います。そういったことも含めながら、日常の生活の中で私たちが使っている言葉だとか、または何かに例えて物を言う時にことわざというものを使ったりするか、さらには自分たちの日本語に対する考え方や疑問点など、みなさんの方から何かご質問があればなさってください。どのような質問でも、大いに歓迎したいと思いますのでどうぞ。

学生：プリントに書かれた「ことわざの性質」のところに「一つ一つは独立した完全体である」とあるのですが、その下のところに「類似することわざ」として、日本のものとイギリスのものとがありまして、これは結果として似ているだけであって、横の繋がりはないということでしょうか？

秋本：はい、そうです。それぞれが独立しているということであって、例えば、「花」とか「時」とかというような日本語を考えますと、それらは別々の単語だけれども、具体的な文の中では、どちらも下に「は」がつくとか「が」がつくとか「を」がつくとか、文法機能としては共通するところがありますね。そういうようなことで、「花」も「時」も単語としては違うけれども、同じ機能を持つことばとして一つの体系の中でおさめることができます。それに対して、ことわざというのは、そういう相互の関係は無いに等しい。もっと言いますと、ことわざってのはね、文学作品に似ているんです。例えば、小説とか、あるいは一つの詩だとか、そういうものと、事柄としては同じものだと思います。だから、ことわざの研究の場合に、例えば小説なり詩なりの研究というのは、何を追求するかということと、その小説なり詩なりがどういう独創性をもっているか、どういう個性をもっているか、ということを追求するんですね。ことわざの場合も、いったいどういう局面をどのように捉えているのか、そういう個性を一つずつのことわざについて、まず考えるべきだと、そういうことであります。

学生：似ているだけであって、源流は違う、全く別の形成過程がある。

秋本：はい。はいそうです。だから矛盾は相互にいくらかでもある。

永野：他にないでしょうか？ さてひょっとするとみなさんは、日常生活の中で、うっかり違った意味でことわざを引用しているかもしれませんね。そういう経験なんかはありませんかね？ そういうことも含めて何か、こういう場合はどうなんだろうっていうことも…じゃ私の方から先生に一つ、質問というか、教えて頂きたいんですけども、ことわざ自体が知恵になるものではないのでしょうか？ ことわざ自体が私たちの日常生活の知恵になるわけではないと、私たちの日常生活の何かを保証するものとして、ことわざが存在しているということを先程おっしゃっていたんですけども、一歩進めて考えてみますと、いろんな我々の人間の日常の営みの中の知恵が、ことわざという形になって帰結していることはないのでしょうか？

秋本：それもその通りです。

永野：そうですね。

秋本：だから出来上がりはその通りなんです。出来上がったものを知恵として使うということは、原則としてないということです。だから知恵に、知恵というともう誤解を皆してしまう。知恵だったら使えるだろうと、そんなありがたいものではない。そういうまあ、便利使いはむしろ人間としてはしていないと。

永野：むしろ、このことわざとか、この成句ですね。この成り立った言葉で表現すると、モヤモヤとした状況が、こう解決するのではないかという使い方をしてしまうということですね。

秋本：はい、そうです。

永野：そういう意味では、例えばみなさんの中

には、「あの人Y Kね」とか…いや違う違う“K Y”か（笑い声）。K Yね、とかいうように使っているのも、結果としては、ことわざの使い方と似ているのかもしれませんがね。いわゆる、この言葉を使えばその状況が保証されるというか、お互いに共通認識されていくんだという形で使っているというのが、ことわざなのかもしれません。

秋本：ええ。だからちょっと言葉を変えますと、指針として使うんじゃないかって、確認事項として使う。これが、まあことわざなんだろうというふうに思います。「いやそんなことはなからう」という意見があるかもしれないと思うことを承知で言っているんです、実は。

永野：さあみなさん、どうですかね？ …はいどうぞ。

学生：「文殊の知恵」の時の説明では、確認程度だっていうのはわかるんですけど、僕が思ったのは「石の上にも三年」っていう言葉はどうなんでしょう？ なんかよく今のCMで、「石の上にも三年」という言葉があるので、これを、この商品を使ってみてくださいっていうものもあるんですよ。

秋本：それもやっぱり確認でしょ？ つまり、「石の上にも三年」というくだりを使って進めるわけですね。だから、「さあこれから三年座ろうか、どうしようか」というので「石の上にも三年」を使うんじゃないくて、石の上にも三年座ればこういうことがあるということを確認した上で、それを使うわけですから。

永野：どうですか？ なんとなく納得できそうですか？

学生：はい。

秋本：それからちょっと言い忘れましたけれどね、三つのことわざを比較研究する場合に、結論的に言いますとね、あまりその三つのことわ

ざの中で、考え方が「英米ではこうだ、日本ではこうだ、中国ではこうだ、だからそれぞれの文化はこう違うんだ」というようなことを期待すると、これは非常に大きい間違いではないかと。実は僕は別にそんなことは考えなかった。今回お話するのに、なんかやっぱりことわざの勉強をしないといけないだろうというので、いくつかのこういうことわざ辞典、これで七万三千語ほど入っているようですけどね、ことわざが。そういうものをずっと見たんですけどね、三つのことわざの、はっきりした違いというのは、どうもでてこない。じゃ何が違うかというと、言い方が違うんですね。同じ事柄について言っているんだけど、国によって言い方が違う。だからまたまた外山滋比古という方が、ちくま学芸文庫の『ことわざの論理』という本の中で述べておられることですがね。ご存知のような、「船頭多くして船山にのぼる」ということわざがあります。それを、他のことわざではどう言うかということで、例がいろいろ挙がってますね。イギリス人はどう言うかというと、「コックが多過ぎると、スープが出来損なう」。特に西洋の場合はね、スープっていうのは非常に、料理の中で大事なんです。日本のソースやスープとかとは全然違う。日本の味噌汁と、それから日本のソース、そういうものを考えて、英語のスープとかソースを考えちゃいけない。それぞれ非常に凝ったものなのですね。だから「コックが多過ぎると、スープが出来損なう」とこういう言い方をする。ところがイタリアでは、「カラスがあまりたくさん鳴くと、太陽は昇らない」なんかそんなことわざがあるそうであります。それからロシア人は、「子守7人、子どもは盲目」。子守が7人もおると、もう子どもはどうしていいかわからなくなってしまうというようなことのようにですね。さらにイラン。イランでは、「産婆が2人いると、赤ん坊の頭が曲がる」。それからエジプトでは、これはわりあい似てますね、「2人船長のいる船は沈む」。日本の場合は「山にのぼる」と言うんですが、「船頭多くして船山にのぼる」と言うんですが、エジプトでは、「2人船長がいる船は沈む」、まあ「山にのぼる」か

「沈む」かどちらにしても困ったことになるということです。つまり、これみな同じことを言っているんですね。しかし言い方がみな違う。つまり、いくつもの文化、生活から出てきたことわざの何が違うかということ、ことわざの言わんとするところが違うんじゃないかって、その言い方が違う。その言い方の違いの中に、それぞれの文化とか生活とか、そういうものが見えてくるというふうに考えるべきものではないかと、これも今回、私が考えたことであります。だからことわざの比較と言うと、なんか違う考えを、異なった知恵を比較するというふうに考える。これは非常に楽観的あるいは楽天的な見方でありまして、そういうような、人間が考えることといったらみな似たようなものなんですね。ただ、言い方が、それぞれの生活様式、思考様式によって異なってくる。これが、本当の違いではないかということを考えるに至りました。これは、今回お話した中の結論の一つであります。ということのをちょっと付け加えておきます。

永野：ありがとうございます。他にみなさん何か、質問等ございませんか？ はい陸先生、どうぞ。

陸君：すみません。今回の日中英のことわざに関する異文化の比較研究は私が提案したものです。私、一応、出身は中国なので、中国語の中でもことわざがいっぱいあって、永野先生としゃべる時に、永野先生は日本のことわざをよく言います。そこで私が気付いたのは、たまに同じものがあって、たまには違う言い方もあります。これはおもしろい研究テーマになりそうだなと思ったので、これから一緒にやっていこうかと話し合い、この研究テーマが始まったのです。

秋本：はいはい。

陸：そこで先生、今日のお話ですが、ことわざについての定義と性質を最初にすごくはっきりと簡潔に説明していただいて、勉強になりました。それから、今日のそのテーマ、タイトルは

「ことわざ研究の諸問題」です。まさに先生のお話しの中で、後半はほとんどこの研究の問題をいろいろ指摘していただいて、私たち三人が、研究を一緒にやっていくうえで、これから注意しなければいけない研究の方向性ややり方を指導的に教えて頂いたので、とても感謝しています。三つの国のことわざとして、私が気付いたのは、違う国、違うことわざで、同じものがあるところもある、違うこともある。中国にはあって、日本にはない。日本語にはあって、英語にはない。このようなものはよく、私が授業中、いろんな教科書の中でいつも気付いているところなので、それはなぜこうなるのかということの研究していこうかなあと考えたのです。やっぱり先生が最後にまとめられたのは、いろんな国のそれぞれの文化における考え方と知恵が、それが違うので、生まれたことわざも違うということです。またお互い影響しあって、翻訳されたものが多いというのも事実です。中国のことわざでも英語から訳されたものも多いです。ところで、先程、先生がおっしゃった中に、ことわざって上等なものではないっておっしゃいましたよね？ 私たちが今研究しているのは、ものすごく上等なものじゃないから、これから研究する価値があるかどうか、先生最後に一言、「日本語、中国語、英語のことわざによる異文化の比較研究」のテーマとしての方向性として、やり続ける価値があるかどうか、あとは、対等な条件じゃないと、比較すると危険性があるという指摘がありましたが、その三つの国で、平等な文化として対等に研究することは、私にとってはちょっと難しいと感じていますが、これをどうやって対等にやっていけばいいですか？

秋本：いやいや、私は陸先生のような方、つまり日本に居て日本語が堪能で、そして中国語は母国語で、そして研究対象は英語である。これほど強いものは無いと思います。ですからこういう日中英の比較研究をするにはもっともふさわしい方だと思います。

陸：それはありがとうございます。光栄です。恥ずかしいですが日本語は全然できないです。

永野先生の厳しい指導をいつも受けています。

永野：今、陸先生が質問されたのは、たぶん異文化の比較という形でのことわざの研究というのは、ひょっとすると、間違いかもしれない。どうでしょうか？ という質問でした。

秋本：今おっしゃったのは、このことわざは、イギリスにはあるけれども中国にはないとかね、その有る無し、これはやっぱり比較する場合に非常に重要だと思うんです。つまりそういうことに対する関心が有るか無いか、あるいはそういうことを言う生活背景が有るか無いか、ということと、直接関わってきますので、ちょっとしたズレがあるとかそんなことよりも、有るか無いか、これがまず、第一だと思います。はい。

永野：ありがとうございます。それと、先生が課題の中に挙げていただきました、日本なら日本のことわざの新旧の比較、つまり“昔の使い方”と“今の使い方”、それと同じように、英語のことわざの新旧のいわゆる違いだとか、中国のことわざの新旧の違いだとか、こういうことも当然そのその時代に生きている人間の日常生活の背景というものと、ことわざが繋がっているってことですから、そういう意味では、比較することは、可能だというふうに考えられますね。

秋本：はい。

永野：もう時間もだいぶ押してきたんですけれども、他にみなさんどうでしょうか？ あなたたち自身の研究を進めていく上で、例えばこういう研究をする場合に、こういうのはどうかということもあるかも知れませんね。あと最後、二人ほど質問を受けようかなあとと思いますが、いかがでしょうか？ なんか私と目が合うと、避ける人もいますが…。

学生：今のその話と関係あると思うんですけど、日本語のことわざと、英語のことわざで、似ているものがある。でもなんかそれは、違うものだ、

みたいな。なんか違うものというか、似ているけれども、それぞれが独立しているみたいな。

秋本：それはね、似ているのは似ているでいいんですよ。別にそれは、似ているけれども全然別だとか、関係が無いとか、そういうことじゃなくて、それだとそれで、やはり日本人も英米人も、この、こういうことについては同じようなことを考えるものなのだなあということで。だからことわざというのはわりあい共通する部分は随分たくさんあると思います。ただ、それが、共通する部分がたくさんあるからといって、それがすべて、お互い、直接の関係があるということじゃなくって、それぞれ、別個に発生して結果的に似たものだと、そういうことなんです。それでわかりただけか？

学生：それで、その別個ものと考えた時に、なんかあまりにも、こう別々にこうしてしまうと、「これはこうだ」みたいなことになってしまう

んではないかなと思って…。

秋本：それはちょっと誤解の無いように言っておきますと、独立するっていうのは、そもそも発生的に、直接関係がないということであって、結果的に類似しているということは、これは人間の考えることですから、むしろ、類似しているようなことは随分多い。けれども本質的に、直接は関係が無い。それぞれが、別個に成立したものである。そういう意味であります。

永野：わかってもらえましたか？ はい。時間もちょうど7時半に迫っておりますので、他にまだみなさん、お尋ねしたいこともあるかもわかりませんが、お手元のコメントカードに、聞きたいことがあったら書いていただいて、無ければ今日の感想を書いてください。

それでは、もう一度秋本先生に、御礼の気持ちを込めて大きな拍手をお願いしたいと思います。（拍手）

